

キさんいんラリ

◆
春号

特集 春の山陰、和を極める

日本料理の真髄

第二特集 出汁を極める

大人のきらり旅

出雲を旅する

出雲のグルメ・スポット

カフェ・蕎麦屋編

日帰り散歩

因幡の民藝

山陰の匠を探す

船木研兒の軌跡

柚木沙弥郎さん、

船木研兒さんのこと教えてください

山陰

人

モノ

味

いいね



49

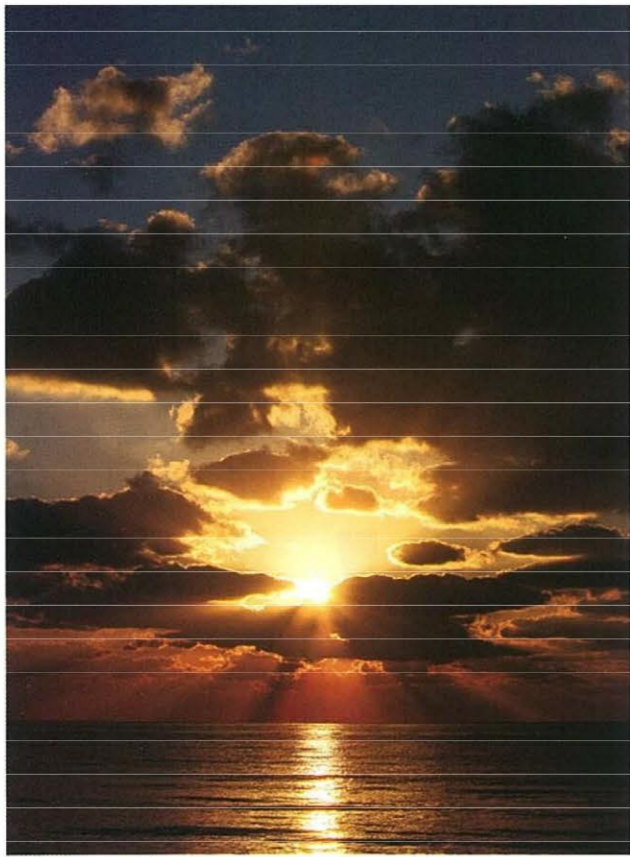
2021

価格 880円

キラリ

春号

編集長 奥田英範
表紙 松尾ミユキ
写真 真川留衣



読者の皆さまへ

やおよろずの
神さまたちの
春の色
しめやかに
風や大地を染めかえて

やおよろずの
神さまたちの
春の音
ふくよかに
木立や浜辺を響かせて

雛たちの合唱
すこやかに
神さまたちの
春のひだまりへ
ようこそ

特集 春の山陰、和を極める

日本料理の真髄

第二特集 出汁を極める

56 山陰の匠を探す

民藝の巨匠たちに愛された天才陶芸家

船木研児の軌跡

船木研児さんのこと教えてください。



14 山陰百景

文/倉恒弘美

廣池昌弘

ファイボナッチ数列の山陰美

72 シリーズ

文/松本佳子

シヨコラ

白谷工房中村建治さんが綴られる
古材と寄木細工の物語

76 特集3

文/日高むつみ

小松電機産業株式会社
人間自然科学研究所

小松昭夫

115 日帰り散歩

文/砂糖まいこ

因幡の民藝

「その歴史をたどる散歩」の巻

82 大人のキラリ旅

文/石原美和

出雲を旅する

109 出雲のグルメ・スポット
カフェ・蕎麦屋編

巻頭ART

9 「菊竹清訓 山陰と建築」

島根県立美術館

11 「しきしまの大和へ奈良大発掘スペシャル」
島根県立古代出雲歴史博物館

インフォメーション

122 タロットカード占い 構成/沙羅ムーン

124 キラリおすすめ 構成/井田裕子

129 キラリ特選情報 本 構成/小谷裕香

シリーズ

120 ひびきあうもの 文/高橋香苗

135 庭からはじまるハッピーライフ 文/池長里美
絵/遠藤佳代子

読者へのお知らせ

130 購読

132 次号予告

一隅を守り 千里を照らす

八雲立つ
出雲の地から
「平和・環境・健康はひとつ」を
世界へ発信する



小松昭夫

小松電機産業株式会社代表取締役
人間自然科学研究所理事長

文・構成/日高むつみ 撮影/神庭恵子 デザイン/多田桐子

広

々とした穏やかな湖面にぼつんと浮かぶ嫁ヶ島。ゆらゆらとした夕暮れともなれば息を呑むほどの絶景が広がる。そんな宍道湖を眺める高台に、唯一無二の構想力で新たな産業を起こしマーケットを創出してきた会社がある。

ベンチャービジネスの旗手として財界・産業界に知らぬ者はない小松昭夫氏率いる小松電機産業だ。東京・豊洲市場をはじめ国内外で18万7000台以上採用されているシートシャッター「happy gate 門番」システムと、市民公連携を提唱し防災対策としても注目されるクラウド総合水管理システム「やくも水神」をゼロから開発、市場を開拓し一つの産業分野として確立。その業績は高く評価され「ニュービジネス大賞」や「もづくり日本大賞優秀賞」、科学技術庁の「注目発明選定証」を受けている。その一方で1994年にはシンク&ドゥタンク「人間自然科学研究所」を設立。平和・環境・健康の実践を通じて追求。四半世紀に及ぶ国境を超えた平和事業は国際的に注目されて、2013年、オランダ・ハーグの平和宮100周年事業「世界の平和フィラ



上/工場や店舗、厨房などの出入口に設置されるシートシャッター「happy gate 門番」。中・下/水に関するあらゆる施設をクラウド管理する「やくも水神」。スマートフォンやタブレットで、災害などの緊急時にもスピーディに的確に対応できる。

上右/コンパクトで工事が簡単な自立型門番。非接触スイッチも標準装備。エアシャワーなど衛生設備との組み合わせがコロナ禍で注目されている。上左/シートはバリエーション豊富。透明性や採光性、防虫、帯電防止不燃など様々なニーズに応える。下/動作中に衝突しても自動的に復元。停電時も下端部を持ち上げれば通り抜けられる超安心構造。

シンロピスト(平和事業家)20人」にビル・ゲイツとともに選ばれている。ただ「happy gate 門番」も「やくも水神」も日常生活の中で目にする機会はごく稀で、私たちがその存在を意識することは少ない。「門番」や「水神」が平和な日常を支える縁の下の力持ち的存在である以上、意識しないに越したことはない。また日々を穏やかに暮らしていると平和や環境、健康に思いをめぐらす機会も多くはない。しかし、こうした事業が地元で生まれ、世界へ広がっているのを知らないのは、実にもったいない。「おもしろおかしくしたのしくゆかいに」を経営理念に、社業を通じて世界に喜びの輪を広げべく奮闘してきた小松氏に、人生・事業への念いや自らの使命・天命について話を聞いた。



小松電機産業株式会社
人間自然科学研究所

本社/鳥根県松江市八雲町東岩坂180
事業所/鳥根県松江市乃木福富町735-188
松江湖南テクノパーク内
Tel.050-3161-2490
<https://www.komatsuelec.co.jp>
<https://www.hns.gr.jp>



小松昭夫 こまつあきお
1944(昭和19)年、鳥根県八束郡八雲村(現松江市八雲町)生まれ。鳥根県立松江工業高校機械科を卒業し佐藤造機(現三菱マヒンドラ農機)に入社。研究所でコンパインの開発設計に携わった。1973年創業。1994年に人間自然科学研究所を設立。2012年に新産業創造による社会貢献で藍綬褒章を授与される。2013年「世界の平和フィランソロピスト20人」、2014年ズットナー賞に選出された。

社会的な大問題が 経営資源。 先端技術で昇華し 新たな事業に。

小松電機産業の原点は松江の南東に位置する旧八雲村だ。ラジオ・電機・機構学の好きな少年だったが、戦後の銀行・農地改革で生家が没落。大学に進学するだけの余裕がない。そこで地元の本社と研究部があり全国展開している三大総合農機メーカー・佐藤造機に就職するべく、当時難関と言われた松江工業高校機械科へ進学。卒論では農機メーカー50社のカタログを集めて耕運機の現状と将来について考察をまとめ1位に入賞。これが入社後、大いに役に立つ。先輩社員の誰よりも他社の情報に詳しい小松青年は新人社員ながら研究所に配属され、農機の開発設計に携わることになる。

「何のために、何をするかを常に考えて、今やることを選ぶ。これは昔から変わらないね」

先を見据えて何をすべきか論理的に考察し布石を打つ。周囲から見れば突拍子のない行動でも、小松氏の脳内に

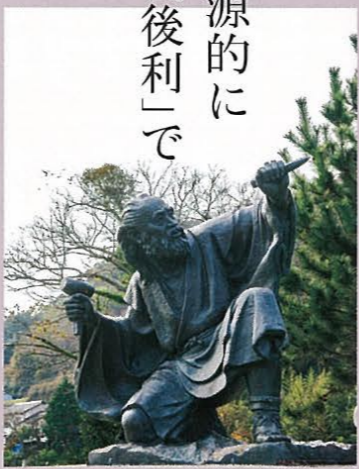
はミッションやビジョンがあり、そこに至るロジックが存在する。時が経ってビジョンが成就すると、周囲はようやく小松氏のかつての行動を理解できるというわけだ。

佐藤造機時代の小松青年も、周囲とは一線を画す存在だった。現状維持・先輩に倣えの社風を嫌い、装置の路線変更や耕運機からコンバインへの配置転換を実現。研究開発職ながら製造現



上/シートシャッター開発の現場で。若手技術者と意見を交わす。下右/製品はすべてカスタムメイドの受注生産。在庫を抱えず、希望納期を聞いて運賃無料で複数の顧客を回れるよう納期を調整。物流費やCO2排出量も削減できる。下左/強風や内外の空気圧の差にも強いパイプ入りの「happy gate 門番」。電気を一切使わず空気圧で稼働するタイプや、マイナス 25℃まで耐えうるタイプなど開発は続いていく。

長期的、多面的、根源的に 「三方よし」と「先義後利」で 判断し行動する。



意宇川河畔にたつ周藤彌兵衛翁像。出家し、ただ一人で鑿を振るう姿。高さ 2.7m、幅 2.8m の巨大な銅像は見るものを圧倒する。

どんな生き方をするのかは定まった。しかし具体的に何をするのかはわからない。そんな小松青年が向かったのは大阪。井の中の蛙にならぬため、商売の都で生きる人を観察し、小さな会社がアイデアと試行錯誤により大手に対抗している場面を目の当たりにした。

そして1973年、小松青年は満を持して故郷に戻り弟とともに起業する。元手は2人の失業保険の30万円、

社屋は生家の納屋。5万円の中古トラックと工具箱ひとつの船出だった。

ポンプ修理業からスタートして電気の配電盤へ、さらに水道の計装システムへと分野を移行しながら拡大

しノウハウを蓄積。実績を上げていったが談合体質の改まらない業界と真つ向からぶつかり配電盤から撤退。倒産の危機も噂されたが、禍を転じて福となすというべきか。板金機械設備を転用し新開発したシートシャッターを製造。これが後の大ヒット「happy gate 門番」に発展していくのである。山陰の冬の強い季節風という地域の悩み事を解決すべく生まれたシートシャッターは、使う側の希望に応じて防虫や抗菌、対低温、帯電防止など様々な用途開発を進め、今や世界中で使われている。

小松氏率いる小松電機産業の凄さは、このシートシャッターに関する技術が業界に公開しているところにある。「技術は囲い込まない。もしも小松が独占していて災害などで稼働できない事態になったら、どうなりますか。

場や圃場に足繁く通い、現場の声や問題点を活かし、新たな農機を世に送り出していく。 「問題ありませんが一番の問題。何か問題はないか、困っていることはなにか、とことん広く深く、観て聴いて考察を繰り返すこと。そこからひらめきが生まれ、問題から商材に、そして商品が誕生するのですから」

死に際して後悔しない生き方とは何か？それが小松氏にとっては「人のため、世のため、自分のため」になる事業をおこし、それを通して社会に貢献することだった。 参禅の最終日、雪の石段で突然降ってきた答えは小松氏の軸となり、時を経て小松電機産業の社是「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」に結実し、経営理念「おもしろおかしくたのしくゆかいに」につながっていくこととなる。

業界全体で技術をシェアすれば、万が一の時もお客様を困らせることはない。 さらに扱う会社が複数になればシートシャッターの認知度も上がりマーケット自体も大きくなる。小さいパイを独占するより、大きくなったパイを増えた分だけ分けでもらうほうが良いと小松氏は言う。まさに「買い手よし売り手よし世間よし」の「三方よし」であり、目先の利益より道義を優先すれば自ずと栄える。「先義後利」を地で行く話だ。 「「買い百両、見切り千両、無欲万両」という言葉があります。無欲の行いには買ひ物の目利きや損きりの見極め以上の価値があるといえます」

その行動には、小松氏の故郷の水の偉人・周藤彌兵衛翁の姿を重ねずにはいられない。 彌兵衛翁は、たび重なる意宇川の氾濫によって甚大な被害を被る村を救おうと、私財を投じ生涯の大半をかけて岩山の開削に打ち込んだ人物である。56歳で一念発起し、村人の非難や家族の不幸に見舞われながらも自ら槌と鑿を手にコッコツと岩を削り続けた。意宇川を迂回させるための切り通しが完成したのは97歳の時。その後、102歳で大往生を遂げたという。 「ああ、いい人生だった」。死に際した彌兵衛翁も、そう思ったに違いない。40年以上に及ぶ無私無欲世のための行いは、令和の時代も人々の心の中に生きて、その思いは受け継がれていく。



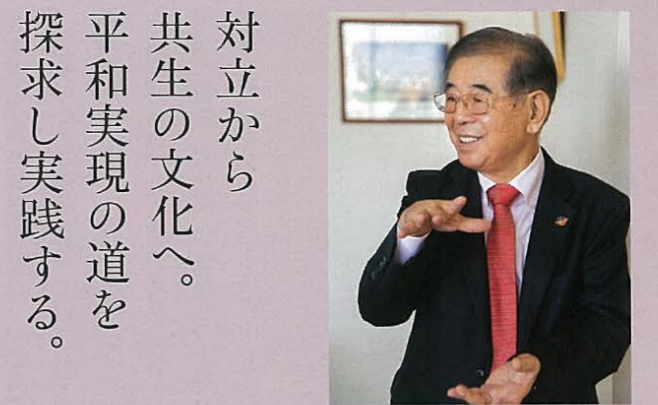
彌兵衛翁、清原太兵衛の物語を後世へ伝えようと書籍を刊行した。



上/八雲町日吉の切り通し。開削前は、剣山から続く稜線が川をせき止めて氾濫を招いた。削られた断面は高さ20mを超えるという。下/今も鑿の痕が残る手掘りの川床。



座右の銘の「中庸」。小松氏は孔子や孟子、墨子、西周をはじめとする古今東西の哲学を考察、実践を通して多くの気づきを得ているという。



誕生日に社員一同から贈られたネクタイをつけて。「ここ一番の勝負ネクタイです」

対立から 共生の文化へ。 平和実現の道を 探求し実践する。

地球温暖化による気候変動が深刻となっている今、また国際分業が進みどの国も一国では生きられない時代にあつて、環境問題は世界中が当事者意識をもって取り組むべき差し迫った課題だと小松氏は言う。

「これを捨て置いて目先の利を追いかける会社は反社会的存在と言つても過言ではない。平和・環境・健康はひとつ。これなくして理想の未来社会実現はありえません」

人が生きるために不可欠な空気と水。この二つを司るシステムを小松電機産業が開発し世界に向けて展開していることは単なる偶然とは言えない。そこ

には人知の及ばぬ天の理が働いているように思えてならない。

「やくも水神」は2000年に出雲市で採用されて以来全国に広がり、現在では470自治体で1万3000施設で採用されている。クラウドによる世界の総合水管理システムであり、専用アプリでタブレットやスマートフォンからもリアルタイムで監視・制御・管理が可能だ。

「夜中の故障時、広域に点在する施設情報を瞬時に把握・共有・遠隔操作。必要な時にはナビゲーション機能で現場に案内、保全ができます」いち早く「やくも水神」を導入した

頂点に近づこうとしています」

この抑制された対立関係を解決に導くことが、世界各地で起きる紛争を昇華するモデルになると小松氏は語る。

「人類は発展か破滅かの大きな分水嶺に立っています。人間は神にも悪魔にも近づける存在。いまこそ人類の叡智を注ぎ、勇気をもって対立から共生の文化へ舵を切るべき時。その発信源は古代文明発祥の地であり、生命の源・水をたたえる湖に抱かれた地であり、朝鮮半島の対岸に位置する六道湖海圈以外にありえない。そして四半世紀を超える人間自然科学研究所の活動を通して、世界各地に信頼し合える人と縁を結びネットワークを構築することができました。今やらなきゃ、いつやる？。ここでやらなきゃどこでやる？」



上/オーストリアの平和活動家・作家で女性初のノーベル平和賞受賞者であるベルタ・フォン・ズトナーの胸像。オランダの芸術家にして国際弁護士、イングリッド・ロレマ氏の作品。台座に刻まれているのは、各国の言語で記された「武器を捨てよ」の文字だ。



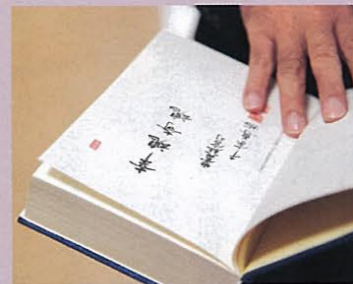
オランダ・ハーグの平和宮で開かれた「世界の平和ファイナンスロピスト20人」パネル展示会。小松氏のほかビル・ゲイツらのパネルも見える。

下/2020年11月に行われた「嫁ヶ島万灯会」。平和を願い、千の灯火が灯された。人間自然科学研究所は「嫁ヶ島万灯会」に周藤彌兵衛翁をはじめとする「水の偉人」の灯明を奉納した。全国世界の水の偉人の顕彰事業も始まっている。



東京都町田市では東日本大震災後の計画停電に備えて事前にマンホール汚水制御に成功。津波で甚大な被害を受けた東北地区では水門の遠隔閉閉管理を導入。東京都武蔵野市では「やくも水神」の雨水管理システムによって得た雨水情報を日Pで公開。市民一人一人の災害に対する意識が高まりつつある。また豪雪被害にあえぐ北陸では消雪施設の遠隔管理に大きな効果が認められたことから急速に普及している。

災害という大きな社会問題を先端のIT技術により解決へと導いた好例と言えるだろう。自然災害は日本だけの問題ではなく、中国やインドで起きた洪水も記憶に新しい。水の情報を一本化、共有することで未然に災害を防ぎ、被害を最小限にとどめる。「やくも水神」は世界からも注目を集めている。「happy gate 門番」と「やく



中国の古典から「平和・環境・健康」に関する名言を選び出した「中国古典名言録(中日韓米4ヶ国語)」を5年かけて編纂。巻頭言には出雲大社宮司・千家尊祐氏による「幸福奇魂」の文字がある。

核放棄へのロードマップ、各国の国民代表で構成され対立を統合発展に導く「国民国連」の構想だ。

小松氏が描き出す未来予想図は決して夢物語でもおとぎ話でもない。一触即発の緊張関係、紛争を招く対立構造は世界を巻きこむ究極の社会問題であると同時に大きな資源だ。平和は単なる観念ではなく事業として取り組むべきテーマ。そしてこの26年をかけた構想を実現に導くことは小松氏の天命なのだ。

も水神」二つのシステムは小松電機産業に大きな利益をもたらした。一般的な経営者ならば、ここで株式上場や規模拡大を目論むだろうが、小松氏は違った。得た利益は会社を大きくするためにではなく世の中のために使う。平和な未来を創出する事業に投資するのだという。その眼差しは世界へ、地球規模の問題へと向けられていた。

そこで設立されたのが人間自然科学研究所。小松氏自身が理事長を務めるシンク&ドゥタンクだ。1994年の設立以来、世界の戦争・平和記念館を訪問。学習や献花、寄付を行うなどの活動を続け、紛争・戦争に至る背景と経緯、実態を調査研究。対話を重ね議論を交わし、対立や緊張を解き共感・共生する道を探し求めてきた。そして今、小松氏はこの平和事業をさらに一歩前へ進めようとしている。

「私たちの住む日本は海を挟んで朝鮮半島と向かい合わせにあり、秀吉の朝鮮侵攻や韓国併合、戦争による遺恨が蓄積され、長らく人権・歴史・領土など多岐にわたる対立が続いています。また、このエリアは3大核保有国であるアメリカ、ロシア、中国の力が拮抗する結節点。いつ何が起きてもおかしくない火種を抱えた地域であり、まさに竹島＝独島問題を契機にその緊張は

クラウドネットワークやAI、VRなどの先端技術は、小松氏の目指す平和のためのプラットフォームを現実のものにしつつある。そして、ここにヒトモノカネが集まり社会変革への一手が動き始めた。先を走り続ける小松氏の姿を、時代がようやく捉えたといつたところだろうか。

「平和や環境、健康はひとつ。世界の恒久平和創出は日本が担う天命。六道湖中海のほとりから人類進化の道を切り開いていくことに誇りを感じます」